

氏 名	江川 克弘
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	第 6051 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学 位 論 文 名	小学校教育における模倣による学習の有効性に関する研究 (A Study of the Effectiveness of Learning by the Modeling Method in Education of Elementary School)
論文審査委員	主 査 教 授 中井 孝章 副 査 教 授 松島 恭子
	副 査 教 授 三船 直子

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、学校教育で軽視されてきた模倣学習（「模倣による学習」）の教育的意義を見出し、それが児童の学力定着に有効であることを検証することにある。

本論文の構成は、「模倣による学習」を理論的に考察した第 1 章と、それを筆者自ら小学校での実験授業を通して実証研究を行った第 2～4 章と、前二者を総合的に考察しまとめた第 5 章から成る。各章の内容は、次の通りである。

第 1 章では 様々な模倣に関する先行研究を通して、小学校教育において「模倣による学習」が不可欠であるのは、学力面でねらいとする認知や技術・技能が言語化できる部分が過小であるため、教師の言語的な説明だけでは児童がそれを充分習得することは困難であり、事例を通しての「模倣による学習」が求められる、ということを解明した。また、熟達した大人の模倣をベースに、熟達した同年代の仲間を模倣対象とする「仲間モデリング」が有効であることを示した。

第 2 章では、学習指導要領で述べられている読解力二極化の実態を受け、説明文読解の学習で「小集団学習における仲間モデリング（模倣による学習）」の有効性を実証・検討した。研究においては、学習方法実験群／対照群を設定し、各群で読解不得意児を 1 人対象児として抽出した。そして、実験群で対象児は読解得意児とグループを組み、教師の発問に対して考えを持ってない場合、得意児の考えを模倣するようにした。また、対照群対象児は、教師の個別指導により考えを持てるようにした。その結果、実験群対象児の方が学習への動機づけも読解力も高まっていることが確認された。

第 3 章では、算数科の学力二極化の実態を受け、「数と計算」領域の単元で「グループ学習に仲間モデリング（模倣による学習）を適用した学習方法」の有効性を実証・検討した。研究は、第 2 章と同様であるが、実験の結果、実験群対象児の方が学習への動機づけもテスト成績も高まっていることが確認された。

第 4 章では、作文学習への動機づけや作文力低下の実態を受け、作文学習で「熟達した大人の文章の視写（模倣による学習）」の有効性を実証・検討した。研究においては学習方法実験群／対照群を設定し、各群で作文不得意児を 5 人、対象児として抽出した。実験群児童は視写する学習を行い、対照群児童は自力で作文を書く学習を行った。その結果、実験群対象児の方が作文学習への動機づけも、作文力も高まっていることが確認された。

第 5 章の総合的考察とまとめでは、第 1 章の理論的考察と、第 2～4 章の実証研究の結果から、「仲間モデリング（模倣による学習）」および「熟達した大人の模倣」を小学校で実践するに際して配慮すべきポイントをまとめた。それは、①模倣機会をフェーディングすることをはじめ、8 つのポイントに配慮して「模倣による学習」を適用するとき、児童の学力向上に有効であることから、その教育的意義が解明された。

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

従来、小学校における児童の学びは、一斉授業のもと、教師の「教える」行為に対する結果として捉えられてきた。ところが実際には、教師の発問に自力で解答できる児童は少数に過ぎず、多くの児童は仲間の解き方を模倣し、正解を出している。つまり、一斉授業では「学級の社会的状況モデル」といった児童同士による模倣学習が生じているのであり、児童の「学ぶ」行為が教師の「教える」行為と独立して成立している場合が少なくない。こうした児童同士の模倣学習は、弟子が師匠のわざを模倣し、習得するとい

う徒弟教育に通底するが、学校の一斉授業においても、本来、知識や技術の習得には模倣が不可欠なのである。ところが、これまで学校は模倣学習の意義を軽視してきた。

こうした状況において本論文は、学校の一斉授業においても不可欠な模倣学習を、教師サイドから模倣学習グループ、すなわち得意児・不得意児・中間児の3者から成る仲間モデリングとして組織化し、さまざまな教科の学習において児童同士による模倣が学習内容を理解する上で不可欠であることを実験授業を通して実証した。模倣学習の必要性を単に理論的に述べるだけでなく、実際の実験授業を通して検証したことは高く評価することができる。また、仲間モデリングだけでなく、視写学習の実験授業においては児童が習熟した大人を模倣することを通して文章を綴ることが向上することを実証したことは、新たな模倣学習の開拓にもつながることから高く評価することができる。

しかも、こうした実験授業を通して、筆者は小学校教育の現場に模倣学習を適用するとき、どのようなポイントを配慮すべきかについても明確に記述しており、今後、小学校をはじめ教育現場で応用可能な知見をまとめている。こうした知見は、従来、わが国で伝承されてきたわざの教育や欧米の認知的徒弟制に通底するものであり、今後、より一層の進展が望まれる。

こうして、本論文は、実証研究を通して、模倣による学習の有効性を解明することによって小学校の授業を改善していく方途を示したという点で高く評価することができる。よって、審査委員会は、本論文が博士（学術）の授与に値するものと認めた。